

QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 4 No. 6, 1997



写真説明 石器を使って巨大なイノシシの解体に挑むー第5回日本
第四紀学会講習会ー於青森市三内丸山遺跡体験学習館 (本文参照)

Vol. 4 No. 6

November 30, 1997

学会からのお知らせ	2	IGCP-396 第2回年回報告	10
第5回日本第四紀学会講習会報告	2	『大学と科学』公開シンポジウム	11
地球惑星科学関連学会合同大会	3	World Deltas Symposium	11
第3回 INQUA/GLOCOPH 国際		第四紀研究連絡委員会議事録	12
会議のお知らせ	8	幹事会議事録	14
第四紀古環境変動シンポジウム報告	9	会員消息	15

◆ 日本第四紀学会ミニシンポジウム

下記のように日本第四紀学会のミニシンポジウムを開催いたします。多数の会員の皆様がミニシンポジウムに参加されますようお願いいたします。

記

日 時： 1998年2月14日(土) 午後2～6時
会 場： お茶の水女子大学 人間科学部本館2階208号室
地下鉄丸の内線茗荷谷駅徒歩5分、有楽町線護国寺駅徒歩5分
オーガナイザー： 太田陽子・大村明雄・中森 亨
テ ー マ： 南西諸島喜界島のサンゴ礁段丘に関する諸問題と最近の成果
参加無料。事前登録等は必要ありません。直接会場において下さい。
問い合わせは企画委員まで(国立歴史民俗博物館 辻誠一郎 Tel. 043-486-0123)。

<主旨>

日本列島でもっとも隆起速度の大きい場所の一つである喜界島で、科学研究費による3つの研究が実施されています。今なぜ喜界島が問題にされるのか、これまでの研究をふりかえりつつ、本島のもつ意味をさぐり、新しい成果の一端を紹介いたします。発表者は太田陽子・大村明雄・中森 亨・佐々木圭一・杉原 薫・木山 修・山田 努ほかで、従来の研究と問題点、パプアニューギニア ヒュオン半島のサンゴ礁段丘との比較、ウラン系列年代と更新世段丘の対比、地表およびボーリング調査による完新世サンゴ礁段丘の形成過程、完新世から現世までの造礁サンゴ群集の推移、完新世初期の酸素同位体比などに関する発表を予定しています。

◆ 日本第四紀学会 1998年大会 第1報

日 時： 1998年 8月26日 (水) 一般発表、評議員会
8月27日 (木) 一般発表、総会、懇親会
8月28日 (金) シンポジウム
8月29-30日(土・日) 普及講演会及び巡検(1日または2日)
会 場： 神奈川県立生命の星・地球博物館
シンポジウム：「相模湾周辺の活構造」オーガナイザー：太田陽子・山崎晴雄ほか

講習会報告

◆ 第5回日本第四紀学会講習会(報告)

秋も深まり行く10月18日(土)・19日(日)の2日間、青森市郊外の三内丸山遺跡体験学習館において第5回講習会を開催しました。第4回と同様『遺跡の環境と生業の復元』を共通テーマに、「そのⅢ：動物遺体群を調べる」と題して、遺跡から出土する動物遺体群の調査・研究の方法を実習し、三内丸山遺跡を例にして遺体群から分かる生態系や人間の資源利用について考えてみました。講師は国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏、早稲田大学の樋泉岳二氏、それに地元の青森県三内丸山遺跡対策室の岡田康博氏の三人でした。参加者は25名、材料の制限から募集人数をかなり絞りこんでしまいました。

第1日目は午後から始まり、西本氏による哺乳類の骨の形態の概説や、縄文人と弥生時代以降の人達の動物資源の利用の違いが骨の残存の仕方に明瞭に出ることなど、実際に骨を割ったりして観察を深めました。その後はいよいよメインのメニュー。縄文中期の石器を使っておよそ70kgはある巨大なイノ

シシを解体(表紙)。皮を削ぎ、肉を切り離して、骨は標本に。30kg以上ある肉は、野菜とともに焼き肉・鍋の具となり夕食に。夕食をとりながら、肋骨から骨角器を作りました。動物の解体などしたことのない参加者は最初はとまどいましたが、次第に自然人になって、資源利用の体験を楽しみました。

第2日目は、地元の市場で買いこんできた代表的な魚類の骨標本を作り、形態的に重要な部分の比較をしました。昼食は解体した魚類の鍋で舌鼓を。さらに三内丸山遺跡から出土した骨類と作成した現生の骨標本とを比較し、動物資源利用の実態や当時の生態系について議論しました。

第4回に引き続き、人と環境のかかわりを考えるための基礎的な講習会でした。今回は考古学の視点から捉えるはじめての試みでしたが、まさに縄文人に成りきった気分で資源の利用や環境の復元方法について考えることができました。

(国立歴史民俗博物館 辻誠一郎)

◆ 地球惑星科学関連学会合同大会プログラムの送付の変更について（重要）

日本第四紀学会では1995年度に地球惑星科学関連学会に正式加盟し、96年より合同大会において固有セッションを設けて一般講演・シンポジウムなどの学術活動を行っております。本学会ではこの合同大会の講演プログラム（発表者、講演題目、会場、時間が掲載されているもので予稿集ではありません）をこれまで約2,000名の会員全員に送付してきましたが、1通の送付に150円、全体で約30万円の送料がかかり、学会財政緊迫化の折り大きな負担となっております。

一方、合同大会へ実際に参加する日本第四紀学会会員の数は固有セッション参加者数などからみて100～200名程度と推定され、このプログラムを利用する人は会員全体の10%程度と思われます。

このような状況を勘案し、幹事会は次回より会員全員への合同大会プログラムの送付は取りやめ、希望者のみへの送付に切り替えることにいたしました。このため**プログラム送付の継続を希望される方は**、官製はがきに「合同大会プログラム送付希望」と明記し、氏名（ふりがな付き）、所属機関および送付先の郵便番号、住所を書いて下記の行事担当幹事までお送りください。FAX、e-mailでもかまいません（電話はご遠慮ください）。

この98年合同大会プログラム継続送付の申し込みの締め切りは1月30日です。その後も申し込みを行えば、以後の合同大会からプログラムが送付されます。ただし、この切り替え作業は希望者を再登録するため時間がかかりますので、1998年5月の合同大会では全員にプログラムが送られる可能性がありますのでご承知ください。

合同大会プログラム送付継続の申込先： 行事幹事 斉藤 文紀
〒305-8567 つくば市東1-1-3 通産省工業技術院 地質調査所海洋地質部
FAX：0298-54-3533 e-mail：yoshi@gsj.go.jp

◆ 1998年地球惑星科学関連学会合同大会について

1998年地球惑星科学関連学会合同大会は1998年5月26日～29日の4日間、東京、代々木のオリンピック記念青少年総合センターで開かれます。開催時期が従来より約2カ月遅くなり、また、講演に投稿料が必要になりましたのでご注意ください。この合同大会では従来の学会固有セッションが廃止され、すべてシンポジウムのみとなります。日本第四紀学会会員はこのシンポジウムのすべてに講演申し込みを行うことができます。また、日本第四紀学会では固有セッションに代わるものとして「第四紀」というテーマのシンポジウムを主催いたします。会員の方は是非このシンポジウムに講演を申し込んでください。以下に案内の概要を記しますが、詳細は合同大会のホームページ (<http://gakkai.stp.isas.ac.jp/>) を参照してください。なお、誌面の都合で図は掲載しておりません。（第四紀学会行事委員・広報委員）

§ 1. 地球惑星科学関連学会合同大会案内

1. 会期：1998年 5月26日（火）～ 5月29日（金）
2. 会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（〒151 東京都渋谷区代々木神園町3-1）
小田急線「参宮橋」駅下車 徒歩約7分
地下鉄千代田線「代々木公園」駅下車 徒歩約12分

3. 講演申込み

§ 2. セッション案内を参照して、投稿するセッションを1つお選び下さい。

講演の申込みはインターネットを利用した電子投稿と、郵便による郵送投稿の2つの方法があり、投稿料、申込み締め切りが異なります。

	締め切り	投稿料（1件につき）	投稿方法
電子投稿	2月27日	1,200円～2,100円	§ 3-1を参照
郵送投稿	1月23日	2,500円	§ 3-2を参照

いずれの方法による申込みでも、図の掲載を希望される方は他に1,000円の追加投稿料が必要です。図の掲載を希望される方は§ 3-4をご覧ください。

4. 大会参加登録

所属学会、講演発表の有無にかかわらず合同大会に参加される方は大会参加登録をして、参加費を納入していただきます。大会参加費は以下のとおりです。

一般参加者(予稿集含む)	学生参加者(予稿集は別売り)
事前登録 5,000円	事前登録 2,000円
当日登録 6,500円	当日登録 2,000円

大会参加の事前登録、当日登録の具体的な方法については§ 4をご覧ください。

5. 青少年総合センターの宿泊

大会会場の青少年総合センター附属の宿舎の宿泊予約をホームページ (<http://gakkai.stp.isas.ac.jp/>) で行っています。

なお、宿泊予約はホームページ経由のみで郵便、FAX等による申込みはできません。締め切りは1月15日です。他に旅行業者による宿舎、航空券の斡旋があります。

6. 投稿料、大会参加費、青少年総合センター宿泊費の支払い

学会からのお知らせ

それぞれ組織委員会から請求書と支払方法の説明や期限の書かれた案内が申込者宛に郵送されます。指示に従って期限までに郵便振替もしくはクレジットカードでお支払い下さい。

7. 住所変更

プログラムは4月下旬頃に、地球惑星科学関連学会事務局から郵送されます。転勤、卒業等で住所変更がある方は、§6の要領に従って、3月31日までに住所変更手続きを行って下さい。

8. 合同大会のホームページ

合同大会に関する情報は、合同大会のホームページに掲載されています。今後も最新情報が掲載されますのでご利用下さい。URLは <http://gakkai.stp.isas.ac.jp/> です。

§2. セッション案内

セッション記号・短縮セッション名一覧表

記号	主学会	短縮セッション名	記号	主学会	短縮セッション名
Aa	全体	21世紀	La	地質	バクテリア活動
Ab	全体	全地球史 / 炭素循環	Lb	地質	気候 / 環境変動
Ac	全体	全地球史 / 組織的研究	Lc	地質	第四紀
Ad	全体	地震フロンティア	Ld	地質	地質大構造 / テクトニクス
Ae	全体	テクトニクス	Le	地質	クラトン / 沈み込み帯
Af	全体	GPS 気象学	Lf	地質	Ridge Flux 計画
Ag	全体	揮発性元素	Lg	地質	海洋地殻生成
Ah	全体	月	Ai	全体	火星
Ma	資源	地層処分	Aj	全体	惑星 / 天体プラズマ
Mb	鉱物	地惑物質の物理化学	Ak	全体	地球深部
Mc	資源	岩石 / 鉱物 / 資源	Md	岩鉱	地惑物質の組織と数理
Ca	地化	対流圏エアロゾル	Cb	地化	地球表層化学
Sa	地震	地震理論 / 解析法	Cc	地化	地殻流体
Sb	地震	地震計測 / システム	Sc	地震	地震発生物理
Da	測地	測地学一般	Sd	地震	震源近傍強震動
Db	測地	地殻変動	Se	地震	地震活動
Dc	測地	地球計測技術	Sf	地震	活断層 / 古地震
Dd	測地	GPS / 変動解明	Sg	地震	活断層深部物性
Sh	地震	地震電磁放射	Ea	電磁	大気圏
Si	地震	地震に伴う諸現象	Eb	電磁	内部電磁現象
Sj	地震	地殻温度構造	Ec	電磁	古地磁気 / 岩石磁気
Sk	地震	地球を掘る	Ed	電磁	電離圏 / 熱圏
SL	地震	地殻構造 / 活動	Ee	電磁	磁気圏 / 電離圏
Sm	地震	地震動と地震災害	Ef	電磁	磁気圏構造
Sn	地震	地震一般	Eg	電磁	太陽圏
Eh	電磁	プラズマ素過程 / 波動	Va	火山	火山深部
Vb	火山	火山活動と災害	Pa	惑星	惑星科学
Vc	火山	火山発達	Pb	惑星	太陽系小天体
Vd	火山	マグマ移動	Pc	惑星	宇宙塵

セッション区分:主学会

担当者名 (電子メールアドレス)

A : 全体	組織委員会企画委員長またはプログラム委員長
C : 地球化学会	石橋純一郎 (ishi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp), 比屋根肇 (hiyagon@geoph.s.u-tokyo.ac.jp)
D : 測地学会	大久保修平 (okubo@eri.u-tokyo.ac.jp)
E : SGEPSS	湯元清文 (yumoto@geo.kyusyu-u.ac.jp), 北 和之 (kita@grl.s.u-tokyo.ac.jp)
L : 第四紀学会 / 地質学会	斎藤文紀 (yoshi@gsj.go.jp), 鳥海光弘 (tori@geol.s.u-tokyo.ac.jp)
M : 三鉱学会	浦辺徹郎 (urabe@gsj.go.jp), 赤荻正樹 (masaki.akaogi@gakushuin.ac.jp)
P : 惑星科学会	倉本 圭 (keikei@neko.lowtem.hokudai.ac), 田近英一 (tajika@geol.s.u-tokyo.ac.jp)
S : 地震学会	佐竹健治 (satake@gsj.go.jp), 金嶋 聡 (kane@geoph.s.u-tokyo.ac.jp)
V : 火山学会	中田節也 (nakada@eri.u-tokyo.ac.jp), 及川 純 (oikawa@eri.u-tokyo.ac.jp)

§ 3-1. 電子投稿方式について

1. 投稿受付期間： 1998年1月12日(月)～2月27日(金)

2. 講演申込み先

宇宙科学研究所, 国立極地研究所及び名古屋大学太陽地球環境研究のWEBサーバーをご利用下さい。

URLアドレスはそれぞれ,

<http://gakkai.stp.isas.ac.jp/>

<http://www.nipr.ac.jp/~abstract>

<http://www.stelab.nagoya-u.ac.jp/ste-www1/~abstract>

です。最初のものが主サーバー, 残り2つが混雑時やトラブル発生時の予備用とお考え下さい。

3. 投稿料

WEBサーバーの混雑緩和のため, 受付日より投稿料が割引, 割増されます。

受付日	投稿料
1月12日(月)～1月31日(土)	1,200円(早期割引)
2月1日(日)～2月21日(土)	1,500円(標準料金)
2月22日(日)～2月27日(金)	1,600円～2,100円 (1日ごとに100円アップ)

本文以外に, 図の掲載を希望する場合は別途料金(1,000円)が必要です。

4. 電子投稿の方法

- 1) WEBブラウザを立ち上げ, 上記のアクセスポイントのいずれか1つに接続下さい。ブラウザはNetscape 3.0が利用できます。(それ以外のブラウザでは, 多少動作に問題があり現在対策中です。使用可能なブラウザについての最新情報は, 上記アクセスポイントでご覧下さい。)
- 2) 画面の指示に従い, 各欄に必要事項を記入後, 「確認ボタン」を押して下さい。入力データに不備があれば, 再入力を促すメッセージが出されます。入力データが完全であれば, 約1分後(混雑の度合いにより)に予稿集印刷イメージと連絡先などのデータが画面に表示されます。
- 3) この画面を見て本文の書式や長さなどを確認下さい。この原稿を投稿する場合は, 内容や書式を確認後「投稿ボタン」を押して下さい。このボタンを押すまでは投稿を受け付けたことになっていません。「投稿ボタン」を押さないで終了すると, それまでの入力データは取り消しになりますのでご注意下さい。
- 4) 「投稿ボタン」を押すと, 直ちに受付番号を画面に表示します。また, 登録した電子メールアドレスに受付番号などの情報を自動送信します。これ以後の事務処理は全てこの受付番号により対応いたしますので, 必ず受付番号を記録して下さい。
- 5) 回線トラブル, 間違えて2重投稿した, 投稿先セッションの間違い等場合には, 投稿を取り消す旨の連絡を電子メールでcancel@gakkai.stp.isas.ac.jp宛にお送り下さい。その際には, 取り消すべき原稿の送信日時, 受付番号, タイトル, 著者名も書いて下さい。なお, 申し込みの取り消し以外(例えば内容修正等)は受け付けません。

投稿に際しては, 投稿練習用のシステム(<http://gakkai.stp.isas.ac.jp>参照)で入力内容をさきに把握し, エディタ等を用いて本文等を前もって用意しておいて下さい。その後, ブラウザを立ち上げて画面の入力欄へcopy & pasteを行うと作業が円滑に進められます。タイトルや本文の表記方法に従来よりも若干の制限が増えましたので§ 3-3もご参照下さい。図を投稿される方は§ 3-4を参照下さい。

§ 3-2. 郵送投稿方式について

1. 投稿受付期間： 1998年1月12日(月)～1月23日(金)(必着)

(電子投稿と同じ形式への変換作業を行うため, 締め切りが電子投稿方式に比べ早目に設定されています。)

2. 郵送宛先： 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部1号館 地球惑星物理学教室気付

地球惑星関連学会合同大会プログラム委員会

3. 投稿料：2,500円

内訳：基本投稿料1,500円+電子化作業負担金1,000円(電子投稿形式への変換作業の手間賃)

4. 投稿方法：以下の(a)～(d)と(g)を郵送下さい。このうち, (c)と(d)は義務ではありませんが, 組織委員会から協力の依頼があった学情センター用データです。この他, 図の掲載を希望される方は(e)を, 原稿の校正を必要とされる方は(f)も同封下さい。
 - (a) A4用紙にプリントアウトした「予稿本文ならびに補助データ」のオリジナルとそのコピー各1部。形式は5. に従って下さい。
 - (b) 「予稿本文ならびに補助データ」の平テキスト形式のファイルを入れたフロッピー・ディスク。ファイル名は「夏目漱石.yok」または「NATSUMES.yok」のように「著者名.yok」として下さい。フロッピー・ディスクは3.5インチ1.44MBもしくは720KBのDOS形式に限ります。
 - (c) A4用紙にプリントアウトした「学術情報センター登録用データ」のオリジナルとそのコピー。形式は6. に従って下さい。
 - (d) 「学術情報センター登録用データ」の平テキスト・ファイルを(b)と同じフロッピーに入れて下さい。ファイル名は「夏目漱石.gak」のように「著者名.gak」として下さい。
 - (e) 図(図が必要な場合に限る。)オリジナルとコピー各1枚を送付のこと。形式は§ 3-4を参照。
 - (f) 校正原稿返信用封筒(校正が必要な場合に限る。定型封筒に80円切手を貼り, 校正を行う人(著者)

の住所を表面に記入してください。)

(g) 郵送投稿用チェックシート(図4をA4用紙にコピーしてお使い下さい。)

5. 予稿本文ならびに補助データの形式

図1のサンプルを参照の上、以下の項目をお送り下さい。

【補助データ】

- 1) 投稿先セッション：§2-1. セッション名一覧から投稿するセッションをひとつ選び、その記号、セッション名もしくは短縮セッション名を記入下さい。
- 2) ショートタイトル：和文で全角15文字2行以内、あるいは英文で半角30文字2行以内。プログラムにはこのショートタイトルのみ掲載します。
- 3) 全著者リスト(漢字名、欧文名、およびカタカナ)：例にならって姓名の間は"/"で区切って下さい。欧文名著者の場合は、漢字表記は"- / -"とし、カタカナ表記は読み(発音)を書いて下さい。発表者には行頭に#印をつけて下さい。著者数は11名以内とし、それを越える場合はグループ名で表記下さい。プログラムには最初の3名のみ掲載します。グループ名の場合も人名に倣ってカタカナによる読みをつけて下さい。カタカナは全角文字を使用下さい。なお、索引の作成にはこのカタカナ表記を使って、機械的に処理します。同一人物でも異なったカタカナ表記をすると別人と扱われますのでご注意下さい。
- 4) 連絡担当者住所・氏名：郵便が届くように記入下さい。電子メールアドレス、FAX番号もできるだけ書いて下さい。著者が海外出張中などの場合、著者以外の人を国内連絡担当者にしても構いません。
- 5) 投稿料支払責任者・住所・氏名：郵便が届くように記入下さい。電子メールアドレス、FAX番号もできる限り書いて下さい。支払責任者は著者以外の人でも構いません。
- 6) 所属学会：招待講演以外は著者もしくは共著者のうち1名は合同大会参加学会の会員でなければなりません。該当者氏名とその所属学会名を記入下さい(入会予定の場合にはその旨明記。)
- 7) 図の有無：必ず明記して下さい。
- 8) 申込の種別：通常の場合は「口頭希望」、「ポスター希望」、「口頭またはポスター」のうちから1つを選び、記入下さい。口頭発表、ポスター発表の区別は必ずしも希望に沿えないこともあります。(コンペーナより前もってその旨の依頼のあったものは、「招待講演」とする場合もあります。)
- 9) 講演時のスライド使用の有無：スライド使用を予定されている場合は「スライド使用予定」と記して下さい。記入がない場合はスライドは使用しないと解釈します。
- 10) 特記事項：他講演との順番の指定、ビデオの使用等の希望がありましたら記入下さい。必ずしも希望に添えないこともあります。ビデオを使用する場合はVHS形式に限ります。会場の都合でビデオが利用できないことがあります。詳しくはコンペーナまでお問い合わせ下さい。

【予稿集印刷原稿欄】

- 1) 和文タイトル、英文タイトル(両方とも必要：和文タイトルは全角30文字2行以内、英文タイトルは半角65文字2行以内に納めて下さい。)
- 2) 著者リスト、所属機関リスト、本文：1行を全角36文字以内とし総行数を30行以内に収めて下さい。半角文字は2文字で全角1文字に換算します。但し、半角文字の印刷には可変幅のフォントを使用しますので印刷仕上がりは原稿とは異なることがあります。本文中で新パラグラフを開始する時、もしくは強制改行が必要な場合には行末に「@@」を書き込んで下さい。単に改行しただけでは前の行と続けて処理されます。

6. 学術情報センターへの登録データ原稿の形式

データ提出にご協力いただける方は、図2の要領で原稿を作成し、予稿原稿と一緒に郵送下さい。日本語タイトル、英語タイトル、使用言語、著者名リスト、所属機関リストに加え、日本語キーワード、英語キーワード(それぞれ6個以内)、日本語抄録(300字前後)、英文抄録(100語前後)の記入をお願いいたします。日本語抄録、英文抄録は、予稿本文の内容を整理する形で書いて下さい。A4用紙に印刷したオリジナル原稿とそのコピーを郵送下さい。また、平テキスト形式のファイルを「著者名.gak」という名前で予稿原稿と同じフロッピー・ディスクに書き込んで下さい。

§3-3. タイトル・本文の表記法の制約について

電子投稿方式、郵送投稿方式を問わず、タイトル、本文の表記には次のルールを守って下さい。

1. 講演タイトル

- 1) 英文タイトルに使用する文字は半角英数字のみ。全角文字・記号は使えません。
- 2) 和文タイトルに使用する文字はJISの第1、第2水準の全角仮名・漢字・記号および半角英数字のみ。
- 3) 英文・和文とも上付・下付文字は使えません。例えば水分子の表現としてはH₂Oとします。

2. プログラム用ショート・タイトル、著者リスト

- 1) プログラム掲載用に上記とは別のショート・タイトル(1行あたり全角15字で2行まで)を記入下さい。
- 2) プログラムには著者名リストの先頭3名を載せます(予稿集には全員を掲載します)。

3. 予稿本文

- 1) 数式はFORTRAN形式など、平テキストで表現できるものに限る。TeX形式は使えません。
- 2) タイトル同様、上付・下付文字は使用できません。
- 3) 行頭からの文字位置を意識した複数行表現はできません。例えば1/3を表現するのに1, 3を上3行にレイアウトした場合、印刷時にはこれらの文字位置はバラバラとなって意味不明となる場合があります。

§ 3-4. 図の投稿

1998年度の合同大会では、予稿集には本文のみを掲載することを原則としますが、図の掲載を特に希望する場合には次のような方法で図を送付下さい。その際、図の掲載料1000円が投稿料に加算されます。申し込み手順が10月に各学会に伝えられたものから多少変更になっていますのでご注意下さい。

1. 図の投稿の形式

図3のようにA4用紙(縦29.5cm横21cmの規格の用紙)の下部にA5縦サイズ(縦21cm横14.7cm)で作成して下さい。印刷時に約70%に縮小されますので、図中の文字の大きさにも配慮下さい。A4用紙の上部には照会用データとして、受付番号(電子投稿方式の場合のみ)、投稿先セッション、申込種別、タイトル、著者名を印刷するか、コピー等を貼り付けて下さい。

2. 図の投稿方法

1) 電子投稿方式で講演を申し込む場合

3月6日(金)必着でオリジナルとコピーを各1部を下記まで郵送して下さい。

図の投稿原稿上部の照会用データに書かれた「受付番号」で仕分けしますので、間違えないように記入して下さい。

図の送付先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部1号館 地球惑星物理学教室気付
地球惑星関連学会合同大会プログラム委員会

2) 郵送方式で講演を申し込む場合

予稿本文と一緒に1月23日(金)までにオリジナルとコピーを各1部、郵送して下さい。

§ 4. 合同大会の参加登録と参加費

合同大会に参加される方は、講演発表の有無にかかわらず参加登録を行い、大会参加費をお支払い下さい。参加登録には事前登録と当日登録があり、参加費は次のとおりです。

一般参加者(予稿集含む)	学生参加者(予稿集は別売り)
事前登録 5,000円	事前登録 2,000円
当日登録 6,500円	当日登録 2,000円

1. 事前登録の方法

郵送による方法：参加登録用紙(図5)に必要事項を記入して郵送下さい(Faxは不可)。

締め切りは1998年3月31日(必着)です。

インターネットによる方法：<http://gakkai.stp.isas.ac.jp/> に接続し、必要事項を書き込んで下さい。

受付期間は1997年12月1日～1998年4月25日です。

事前登録された方には、請求書、郵便振替用紙を郵送します。請求書に明記する〆切日までに、郵便振替またはクレジットカード(VISAまたはMASTER)でお支払い下さい。クレジットカードの場合は、支払い書類に必要事項を記入し、本人が所定欄にサインをして郵送下さい。事前登録して支払いを済まされた方には会場にて名札と予稿集をお渡しいたします。

2. 当日登録の方法

総合受付(場所は4月発行の合同大会プログラムに掲載されている会場案内図を参照)にて、大会開催当日に受付時間内(8:30～16:00の予定)に参加登録を行い、参加費を現金でお支払い下さい(カード不可)。その際、釣り銭のないようご協力ください。

§ 5 住所変更の連絡について

合同大会のプログラムは地球惑星科学関連学会事務局が管理する共通名簿に基づき、印刷所から直接郵送されます。今回の発送は4月下旬を予定していますので、事務局では各学会の名簿をもとに1998年3月末をめどに共通名簿の訂正・編集を行います。合同大会参加各学会の会員で、現在登録されている住所から変更のある方

(ただし、1997年12月までに所属学会に住所変更届を済ませた方は除く)、及び近日中に住所の変更が予定されている方は、変更届出用紙に必要事項を書き込み、3月31日までに下記連絡先宛に送付下さい。また、e-mailによる住所変更の連絡も受け付けます。いずれの場合も受領通知は致しませんのでご了承下さい。

連絡先：〒152-0033 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学理学部地球惑星科学
本蔵 義守 FAX: 03-5734-3537 e-mail:yhonkura@geo.titech.ac.jp

◆ 国際第四紀研究連合(INQUA)第15回大会—南アフリカ共和国・ダーバン

1997年12月1日から、事前登録者あてSecond Circularの発送が開始される予定です。アブストラクト及び参加補助申請の締切は1998年3月31日です。XV INQUA ホームページからの事前登録(Pre-Registration)締切は1997年12月31日です(<http://INQUA.geoscience.org.za/>)。参加希望の方は至急オンライン登録をどうぞ。また、大会事務局あて氏名・所属・住所・性別・同伴者・電話/ファックス番号・電子メールアドレス等を知らせてSecond Circularを請求することも可能と思われます。

大会事務局：Conference Africa P.O. Box 1722, Parklands 2121, JOHANNESBURG, South Africa
Fax: +27-11-447-8144, e-mail: cafrica@iafrica.com

◆ 第3回地球古水文環境変動(INQUA/GLOCOPH) 国際会議
- GLOCOPH '98 -のお知らせ(第1報)

下記の国際会議への参加を希望される方は First Circular をご覧のうえ1998年1月31日までにお申し込み下さい。First Circular が必要な方は下記の実行委員会事務局までご連絡下さい。多数の方の参加をお待ちしております。

会議名：第3回地球古水文環境変動(INQUA/GLOCOPH) 国際会議 - GLOCOPH'98 -
日程：1998年9月4 - 11日(8日間)
開催場所：立正大学熊谷キャンパス(熊谷市万吉)及び日本アルプス山岳地域
構成：セッション(3日間)、プレ小巡検(1日間、荒川流域)、ポスト巡検(4日間、日本アルプス山岳地域)
メインテーマ：過去2万年間の古水文変動・古環境変動 - 湿潤・温帯・変動帯地域を中心に -

セッションのテーマ：

- 1) 古洪水の復元
- 2) 古水文変動の地域間の対比と比較
- 3) 氷河・周氷河地域の古水文変動
- 4) モンスーン地域の古水文変動
- 5) 変動帯の古水文変動
- 6) 乾燥・半乾燥地域の古水文変動
- 7) 氷期/後氷期移行期の気候変化に対する水文地形プロセスの応答
- 8) 古水文変動研究の流域管理、防災、環境保全、及び地球温暖化に対する水文地形応答に関する研究への応用

主催：第3回地球古水文環境変動(INQUA/GLOCOPH) 国際会議実行委員会

共催：日本第四紀学会・日本学術会議第四紀研究連絡委員会

後援：日本地理学会・日本地形学連合・東京地学協会・日本陸水学会・日本地下水学会・日本水文学会・日本沙漠学会(依頼中を含む)

実行委員会：委員長 - 門村 浩、委員 - 遠藤邦彦・福沢仁之・岩田修二・久保純子・小口 高・小野有五・斎藤亨治・島津 弘・田村俊和・米倉伸之

プログラム：

- 第1日 9月4日(金) 荒川流域巡検
第2 - 4日 9月5日(土) - 7日(月)
ペーパー及びポスターセッション
第5 - 8日 9月8日(火) - 11日(金)
日本アルプス山岳地域巡検

参加登録：

参加希望の方は First Circular に添付の Provisional Registration Form に必要事項を記入して下記の実行委員会事務局までお申し込み下さい。FAX, E-mailによるお申し込みも歓迎します。..

発表申込：

口頭またはポスターで発表を希望される参加者は、Provisional Registration Formでタイトルをお知

らせ下さい。アブストラクトは、図表、文献を含め4ページの Extended Abstract (英語, A4) を予定しています。執筆要領についてはセカンドサーキュラーでお知らせしますが、今から準備して下さいと幸いです。

巡検：

- 1) 荒川流域(9月4日)：古洪水イベントの現場証拠と復元手法、河川防災への応用
参加者全員を対象にプレ巡検として行われ、経費は登録料に含まれています。
- 2) 日本アルプス山岳地域(9月8 - 11日)：湿潤変動帯山岳地域の現在の地形プロセスと古水文環境変動の復元、流域環境保全への提言
参加費用は50,000円の予定です。参加希望の有無を Provisional Registration Form でお知らせ下さい。

登録等の締切日：

- 1998年1月31日 予備登録締切
1998年2月28日 セカンドサーキュラー(アブストラクト作成要領、プログラム・宿泊料等詳細) 発送
1998年5月31日 アブストラクト、登録料・宿泊料等受付締切

登録料：

- 1998年5月31日以前
一般：20,000円 同伴者：10,000円
学生：10,000円
1998年5月31日以降 各5,000円増し

* 払い込み方法はセカンドサーキュラーでお知らせします。

会場案内：

ペーパーセッション及びポスターセッションの会場は、立正大学熊谷キャンパス8号館を予定しています。

会場への交通は、JR上越新幹線・高崎線熊谷駅東口、または東武東上線森林公園駅からバスで約20分、JR熊谷駅西口からタクシーで約10分です。

宿泊案内：

立正大学熊谷キャンパス学生寮・ユニデンスA館・C館(合計120人分)が1泊3食付き3,000 - 5,000円の低廉な料金で利用できます。ただし、バス・トイレ付きはツイン2部屋、シングル22室で、他の大部分は1部屋10ベッドの大部屋(バス・トイレ共同)です。JR熊谷駅の周辺には数軒のビジネスホテルがありますが、交流と討論を深めるためにも、できるだけユニデンスをご利用下さい。宿泊の希望を Provisional Registration Form でお知らせ下さい。

連絡先：

〒141 東京都品川区大崎4-2-16
立正大学文学部地理学教室
GLOCOPH '98 実行委員会事務局 島津 弘
TEL 03-5487-3272 FAX 03-5487-3353
E-Mail shimazu@ris.ac.jp

◆ アジア・西太平洋地域における第四紀環境変動に関する国際シンポジウム (International Symposium on Quaternary Environmental Change in the Asia and Western Pacific Region) (報告)

上記の国際シンポジウムが、平成9年10月14日～平成9年10月17日(4日間)に東京大学山上会館において開催され、国内98人、国外42人の合わせて140人が参加して、成功裏に終了した。

この国際シンポジウムの目的は、アジア・西太平洋地域における第四紀環境変動に関する研究の現状をまとめ、研究成果を交流し、今後の研究課題を明らかにすることである。第四紀研究の立場から、自然環境の変動のプロセスとメカニズムを明らかにすることは、人間による環境改変を評価し、現在から近未来にかけての環境資源の利用と管理についての科学的な基礎を得るうえで、大きな成果であったと考える。アジア・西太平洋地域における第四紀環境変動に関して、口頭発表53編、ポスター発表34編、合わせて87編の研究発表があった。国外からの参加者の内訳は、中国(香港と台湾を含む)(17人)、オーストラリア(5人)、韓国(4人)、インドネシア(4人)、ロシア(2人)、フィリピン(2人)、ベトナム(2人)、アメリカ(2人)、タイ(1人)、ニュージーランド(1人)、ブラジル(1人)、英国(1人)であった。

さらに、アジア地域における国際第四紀学連合(INQUA)の加入国は、現在のところ、日本、中国、韓国の3ヶ国に過ぎないが、未加入国であるインドネシア、ベトナム、タイ、フィリピンなどの研究者を含めて研究集会を開催し、今後の研究交流について意見を交換できたことは、今後国際第四紀学連合の各種の活動を活発にするうえでよい機会となり、アジア太平洋地域における研究者のネットワークを構築する上でも、この国際シンポジウムは重要な役割を果たした。

第1日から第3日までのセッションでは、第四紀環境変動に関する6つのテーマについて研究発表を行った。第4日にはサンゴ年輪に関する特別セッションを日本海洋科学振興財団・日本海洋科学技術センターと共催するとともに、シンポジウムの研究報告のまとめ方について検討し、今後の研究課題・研究交流について分野ごとに意見を交換した。

シンポジウムの開催日程、セッションのテーマ(和文)、(コンピーナー名)、発表論文数および主要な発表内容は以下のとおり。

第1日(平成9年10月14日)

午前 セッション1 第四紀の高精度層序と編年(熊井久雄)口頭発表7編、ポスター発表4編

千島列島国後島、中国黄土高原、ニュージーランド・ワンガヌイ盆地、インドネシア・サンギラン盆地、日本の大阪堆積盆地、関東構造盆地、バイカル湖などに関する第四紀層序の詳細な研究結果が報告され、広域の対比について新しい見解が示された。

午後 セッション2 東アジアにおけるパレオ・モンスーン変化の復元(小野有五)口頭発表7編、ポスター発表6編

第3紀から第4紀にかけてのアジアモンスーンの復元、チベット高原の隆起と侵食面の形成、中国黄土高原におけるレスー古土壌層序から復元したモン

スーン活動、中国黄土高原から日本列島にかけての最終氷期における古環境復元、南シナ海における気候変化、日本海周辺海域における最終氷期前半における古環境などについての研究発表があり、アジアモンスーンの復元について研究の進展があった。

第2日(10月15日)

午前 セッション3 海岸動態：デルタと大陸棚の第四紀後期の環境変動(斉藤文紀・海津正倫・Yim, W.S.)口頭発表10編、ポスター発表7編

東南アジア、オーストラリア北部における三角州平野の形成、タイ中央平野下流部の第四紀後期の地質、ベトナム・メコン三角州の完新世堆積物、中国南部珠江における第四紀海面変化、中国長江デルタの第四紀環境変化と地形発達、東シナ海および黄海の第四紀層序、黄河三角州の自然および人間による環境変化などについて研究発表があり、三角州と大陸棚の第四紀における動態が解明され始めた。

午後 セッション4 第四紀後期の海面変化とテクトニクス(太田陽子・大村明雄・Berryman, K.)口頭発表6編、ポスター発表3編

パプア・ニューギニア、東チモール、オーストラリア、ニュージーランド、インドネシア、フィリピン、台湾、琉球列島を含む日本各地などから、第四紀後半から完新世にかけての海岸地形の発達、海面変化と地殻変動に関する研究発表があり、第四紀の様々な時期における地殻変動速度の一様性と時代的变化、完新世の温暖期における環境変化は将来予測に役立つかなどについての議論が行われた。

第3日(10月16日)

午前 セッション5 サンゴ年輪による古海洋環境(茅根 創・松本英二)口頭発表8編、ポスター発表5編(うち1編追加)

南シナ海、黒潮海域の表面海水温と降水量の復元、サンゴ年輪による表面海水温・降水量・蒸発量・沿岸湧昇の復元、東インド洋における湧昇と表面海水温、パプアニューギニアのサンゴ年輪による西太平洋における1881年以降の気候変動、プエルトリコ産サンゴの1980年代と小氷河期の酸素と炭素同位体の比較、サンゴの放射性炭素測定による海洋/大気の二酸化炭素交換速度の変化モデル、マグネシウムとストロンチウムによる気候変動記録、沖縄地域の完新世サンゴ年輪による海水温の復元、サンゴ年輪の酸素同位体変化に対する成長速度の季節変化の効果などについて研究発表があり、サンゴ年輪研究の最近の成果と進展が示された。

午後 セッション6 西太平洋とその縁辺海の古海洋環境(大場忠道・汪 品先)口頭発表8編、ポスター発表9編

北西太平洋、オホーツク海、日本海、東シナ海、黒潮海域、沖縄トラフ、南シナ海、西太平洋暖水域など西太平洋とその縁辺海における第四紀の古海洋環境変化に関して、海底堆積物に含まれる有孔虫化石、珪藻化石、ココリス化石、炭酸塩、風成堆積物、火山灰堆積物などの分析や酸素同位体分析などにもとづく研究発表があり、氷期-間氷期サイクルにおけ

る長周期と短周期の環境変動の実態が明かにされた。
第4日(10月17日)

午前・午後 特別セッション 年輪によるサンゴ気候学(松本英二・茅根 創) 口頭発表7編(うち1編追加)

熱帯南西太平洋, 台湾, 沖縄, パプアニューギニア, ヴァヌアツなど西太平洋各地におけるサンゴ年輪による完新世から更新世にかけての古気候の復元に関する研究発表があった。

午前 分科会(各分野における研究発表のまとめ方と今後の研究交流についての意見交換)

この国際シンポジウムは, 日本学術会議第四紀研究連絡委員会と日本第四紀学会の共催として, 第四紀環境変動国際シンポジウム実行委員会(委員長:米倉伸之, 委員:海津正倫, 遠藤邦彦, 太田陽子, 小野有五, 大場忠道, 大村明雄, 茅根 創, 熊井久雄, 小池裕子, 齊藤文紀, 田村俊和)により運営された。

また国際第四紀学連合(INQUA:International Union for the Quaternary Research), 同第四紀海岸線研究委員会, 同第四紀海岸線研究委員会西太平洋小委員会, 同層序研究委員会アジア太平洋地域小委員会, 国際地質対比計画(IGCP:International Geological Correlation Program) 367, 396, 国際地球圏生物圏協同研究古環境研究計画日本委員会(IGBP/PAGES Japan), 同海岸・沿岸域における陸域海域の相互作用研究計画日本委員会(IGBP/LOICZ Japan), 日本地理学会, 日本地質学会, 東京地学協会, 地質調査所の後援をうけ, 日本学術振興会, 東京地学協会, 福武学術文化振興財団, 日本海洋科学振興財団, 日本海洋科学技術センター, 東京大学からの資金援助のもとに開催された関係諸機関からのご後援および資金援助に感謝いたします。

(文責 米倉伸之)

◆ IGCP-396「第四紀の大陸棚」第2回年会開催される

97年7月21日から23日まで, 英国ダラム(Durham)でIGCP-396(Continental shelves in the Quaternary)の第2回年会が開催された。IGCP-396は昨年から開始された5年計画のプログラムで, 香港大学のW. Yim氏とシドニー大学のP. Davies氏がリーダーとなっている。昨年11月1-3日にシドニー大学で第1回年会が開催され, 今年が2年目, 2回目である。

IGCP-396は, 第四紀の海水準変動に伴う環境変動を最も受けた大陸棚域の堆積物の研究が, 陸上の第四系や深海のODPなどの研究と比べて遅れていることから, これらに焦点を当てて始められたプログラムである。現在の沿岸域を含めた大陸棚の堆積・侵食プロセス研究, 珪屑性堆積物の陸棚研究, 炭酸塩堆積物の陸棚研究, 年代測定法, シーケンス層序, 古海洋学, 海洋資源, 海洋工学などの分野を含む総合プロジェクトである。これらは現在の沿岸・陸棚域だけを対象とするのではなく, 離水し, 陸上で見られる沿岸・陸棚堆積物や, 沈降し, 斜面下に分布するものも含まれる。浅海第四系を扱っている人すべてが対象といってもよい。

今年の年会では, 25件の口頭発表と約10件のポスター発表があった。午前中は基本的には研究発表が行われ, 午後は初日は研究発表と全体会議, 2, 3日目はワーキンググループ会合と全体会議という構成で行われ, 朝9時から夕方6時頃まで, ゆったりとし, なおかつ密度の濃い内容となっている。出席者は11ヶ国から約40名の参加で, 日本からは残念ながら筆者1名であった。

主な研究発表としては, Bill Austin (Univ. Durham, UK)によるスコットランド沖から採取したコアを用いての古海洋の研究, 特にこの海域のコアはYounger Dryasの時期の堆積速度が速く数mに達し, 高分解能の研究が可能であり, 陸上とのテフラとの対比や年代論に関して発表があった。同海域ではIMAGESによるコアも採取されており, 彼に申しこめば共同研究も可能である。シーケンス層序や珪屑性堆積物の研究では, Javier Hernandez (Univ. Cadiz, Spain)らによる高分解

能音波探査による最終間氷期以降の陸棚から外縁のシーケンス層序が示され, 10万年と2万年周期の海水準変動によって形成されるシーケンスのモデルが提示された。またMax van Heijst と George Postma (Utrecht Univ. Netherlands)らが実験水路で基準面を昇降させ高海水準期のデルタから開析谷, さらに低海水準期の外縁デルタを形成し, 堆積物供給量, 水量, 基準面の変動モデルを示した。またGilles Lericolais (IFREMER, France)やHeiner Josenhans (Geol. Surv. Canada)らは, 三次元の高分解能地形調査を陸棚域で行い, サイドスキャンソナーの記録, 三次元の音波探査記録を用いて, 既存の地形図からは読み取りにくい, 堆積侵食微地形の解析を行い, 埋積谷や海底表層のベッドフォームを示した。これら詳細な三次元の解析が今後の主流となりそうである。層序関係では, 海面低下期の離水によって形成されるDesiccationに関する報告がいくつか示され, 密度や磁化率, 色調などに変化が見られ, 炭素14年代でも若返りが見られる可能性があることが報告された(Wyss Yim, Univ. Hong Kong)。

年会で行われた全体会議では, 各国からの報告, 昨年の年会のプロシーディング(Marine Geology 特集号)の進捗状況, 各ワーキンググループ会合の報告が行われた。また次回年会開催地の提案がバニニューダ, 上海, ゴアからあり, 採択の結果, インドのゴアの国立海洋研究所で来年10月に行われることになった。次回の会合は, 登録料が食事込みで3日間で200-250米ドル, 宿がシングルで30米ドル, ツインで50米ドル, 巡検も日帰りは20米ドルと予定されている。インドの西側の海岸域を見ることのできる絶好の機会である。日本からの多数の参加を期待したい。IGCP-396に関心がある方は筆者までご連絡下さい。また次回のゴアの会合については情報が入り次第第四紀通信に掲載の予定です。

国内連絡先: 305 つくば市東1-1-3

地質調査所海洋地質部 齋藤文紀

tel. 0298-54-3772, fax. 0298-54-3533

e-mail: yoshi@gsj.go.jp

◆ 第12回「大学と科学」公開シンポジウム ー文化財を探偵するー
(平成9年度科学研究費補助金-研究成果公開促費)

研究代表者：西村 康

(重点領域研究『遺跡探査』研究代表者)

期日：平成10年1月31日(土)、2月1日(日)

場所：東京都千代田区有楽町2丁目朝日ホール

後援依頼団体(予定)：日本文化財探査学会、日本文化財科学会、日本考古学協会、日本文化財保存修復学会、史学会、建築史学会、物理探査学会、電子情報通信学会、日本リモートセンシング学会、資源・素材学会、(社)日本化学会、日本第四紀学会、日本写真測量学会、(社)可視化情報学会、(社)精密工学会、(社)地盤工学会

連絡先：西村 康

奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター

〒630 奈良市二条町2丁目9番1号

Tel. 0742-34-3931 (内) 257, 249

Fax. 0742-35-1358

E-mail: nyasushi@nabunken.go.jp

プログラム(案)

平成10年1月31日(土)

あいさつ(10:00~10:10)

基調講演(10:10~11:00)文化財と探査

奈良国立文化財研究所長 田中 琢

一般講演(11:00~12:00, 13:00~15:30)

- 1 原の辻遺跡にみる老岐国の復原
奈良国立文化財研究所・西村 康

- 2 筑紫君磐井の墓の謎

立命館大学文学部 和田晴吾

九州大学工学部 牛島恵輔

- 3 地磁気であけた宝の箱 加古川市行者塚古墳

東京工業大学大学院 亀井宏行

- 4 西都原・地下式横穴の謎

天理大学文学部 置田雅昭

東京水産大学水産学部 和田 俊

- シンポジウム 地下を探る(15:50~16:40)

司会 奈良国立文化財研究所 猪熊兼勝

帝京科学大学・理工学部 中條利一郎

平成10年2月1日(日)

一般講演(10:00~12:00, 13:00~15:50)

- 1 建造物の超音波診断 春日大社からニコライ堂まで
山形大学工学部 足立和成

- 2 コンピュータで平城宮朱雀門を復原する

奈良国立文化財研究所 森本 督

- 3 正倉院宝物とX線 正倉院事務所 成瀬正和

- 4 旧石器時代の道の駅-岡山・恩原遺跡

岡山大学文学部 稲田孝司

- 5 よみがえる古代壁画の色

奈良国立文化財研究所 沢田正昭

- 6 奥州・藤原三代の絹が語る

帝京科学大学理工学部 中條利一郎

- シンポジウム 遺物を探る(15:50~16:40)

司会 天理大学文学部 置田雅昭

横浜市立大学理学部 齊藤正徳

◆ World Deltas Symposiumのお知らせ

Louisiana State Universityのホームページ(<http://opal.ga.lsu.edu/deltas98>)にWorld Deltas Symposiumの案内があります。以下に内容の一部を転載します。発表申込みの締切は1998年1月15日です。詳しくは同ホームページをご覧ください。

会議名：World Deltas Symposium

場 所：Hotel Intercontinental, New Orleans, Louisiana, USA

日 時：August 23-29, 1998

会議の概要(原文のまま)：

The symposium provides a forum for interaction among scientists, engineers, and decision-makers to discuss challenges facing the world's populated deltas-economic, social, and scientific.

Introduction

THE CHALLENGE

The world's deltas are among the most productive, populated, modified, and, at the same time, fragile systems on earth. New information, such as the United Nations Intergovernmental Panel on Climate Change, dem-

onstrates that deltas are among the regions most vulnerable to harm from natural processes and human activities. Today, science and technology have progressed to a level where deltaic systems are better understood than ever before. Our challenge is to build on this accumulated knowledge.

THE PURPOSE

The purpose of the World Deltas Symposium is to inform scientists, engineers, and decisionmakers about available information and concepts needed for working and living in this dynamic environment. Internationally-recognized experts in the physical, biological, engineering, and socioeconomic disciplines will share their experiences and observations on the current state of deltas and assess how this information can help us meet the demands of the future. In addition to invited speakers, the symposium committee will select from submitted abstracts to create a program that extends beyond the classic domains.

Attendees will hear presentations and have access to posters, exhibits, and displays on the more detailed elements and processes creating and comprising a deltaic environment. New Orleans, which owes its existence to the Mississippi River delta, offers a premier location for the symposium. Regional scientists will lead field trips and discuss ongoing research and issues facing one of the most

シンポジウム案内

studied deltaic systems.

All presentations will be made before the entire conference audience. Eight major populated deltas will be the focus of a morning or afternoon session. Internationally recognized experts who will present their work include Dr. D.J. Stanley (Nile), Dr. H.J. Walker (Arctic), Dr. Augustin Sanchez-Arcilla (Ebro), Dr. John Milliman (Ganges/Brahmaputra), Dr. Joost H. J. Terwindt (Rhine), Dr. Carlo Cencini (Po), and Dr. Xiqing Chen (Yangtze). In addition, several papers will be presented on the Mississippi delta.

Submissions should focus on one of the following: (a) geologic framework; (b) natural/physical processes; (c) biological/ecological processes; (d) socioeconomic considerations; or (e) human influences. Each day, two major deltas will be presented, and papers that relate will be offered for the remainder of that session. If the subject of your paper is a delta that is not listed above, we will place your presentation where it will best fit.

Committee

Scientific Panel: James M. Coleman Ph.D., Harry H. Roberts Ph.D., Gregory W. Stone Ph.D., H. Jesse Walker Ph.D.

Organizing Local Committee: Ann E. Burruss, Mark Davis, Rod Emmer Ph.D., Jami Donley, Juli Figeac

Academy: Carlo Cencini Ph.D., Chen, Jiyu, Ren, Mei-e Ph.D., John Milliman Ph.D., Augustin Sanchez-Arcilla Ph.D., Daniel J. Stanley Ph.D., Joost Terwindt Ph.D.
Plenary Session

The Planning Committee will welcome the delegates to the World Deltas Symposium at the Plenary Session on the morning of August 24, with introductions, and a Plenary speaker.

Presentations

Please follow the instructions for submission of abstracts or email to jdonley@unix1.sncc.lsu.edu. Electronic submission is the preferred method; however, if you cannot submit electronically, you must include 2 copies of your abstract, along with a 3.5" diskette containing your abstract in MS Word, Wordperfect or ASCII text. Abstracts must be limited to 300 words and written in English. Deadline for submission is January 15, 1998. Presenters will be notified in early February.

For more detailed information contact:

Juli Figeac, Conference Coordinator.
117 Pleasant Hall, Louisiana State University,
Baton Rouge, LA 70803.
Phone: 504-388-6479 Fax: 504-388-6570

学会報告

◆ 第16期第11回 第四紀研究連絡委員会議事録

日時：平成9年7月18日(金)

13時30分から15時30分まで

場所：日本学術会議第5部会議室(6階)

出席者：池田安隆, 上杉 陽, 太田陽子, 熊井久雄, 小池裕子, 酒井潤一, 松島義章, 米倉伸之(8名)

欠席者：大場忠道, 坂上寛一, 新藤静夫, 立石雅昭, 野上道男, (5名)

1. 前回(5月23日)議事録案はすでに通信にて承認し、「第四紀通信」に掲載済み。

2. 報告

委員長からの以下の報告があった。

(1) 新藤会員に代わって6月2日の地質科学総合研連の議事録について報告され、第16期の総括と17期への引き継ぎ事項および地質科学関係学協会連合の発足は当然見送られることになったことが紹介された。

(2) 第4部長から第1常置委員会委員長宛ての「研連の見直し」についての文書が紹介され、7部制には矛盾があるが、今回は7部制に手を加えない前提を容認すること、専門委員会を実質的には研連と同格として扱うこと、第4部は国際対応の比重が大きいので、その点を考慮すること、第4部における見直しについて地球科学、生物学は細分化されたままであるが、基本的には大型の研連とし、その中に複数の専門委員会を持つ形にすることについておおかたの理解が得られたことなどが述べられた。

(3) 地球化学・宇宙化学研連から「地球環境に関わる地球化学の推進について」という研連の対外報告がだされたことが紹介された。

(4) 国際第四紀学連合事務局からの連絡について紹介された。

2. 審議

(1) 第四紀関係の教育体制について

立石委員(欠席)からの「第四紀関連教育・後継者要請システムに関する活発な討論を—教育体制に関する資料をまとめるに当たって—」という文書が送られてきているので、その内容について検討した。今回は立案者の委員が欠席しているなど、内容を検討するに十分な用意がないので、取り扱いは委員長に一任することとした。

(2) 前回、委員長から提出された第四紀研連第16期の活動報告について検討して、その内容を承認した(その内容は以下に掲載する)。

なお、今期の委員の任期は10月20日までであるが、7月中旬には第17期が発足するので、第16期の研究連絡委員会の会合は今回で実質的に終了することとなり、最後に委員長から委員各位への謝意が述べられた。

日本学術会議第四紀研究連絡委員会 第16期の活動報告(1997年7月18日委員会にて承認)

1. 16期研究連絡委員会の構成(13名)と任期

日本学術会議会員(1名)：新藤静夫

日本第四紀学会推薦(9名)：池田安隆, 上杉 陽,

大場忠道, 熊井久雄, 小池裕子, 相馬寛吉, 立石雅昭, 松島義章, 米倉伸之(相馬寛吉委員の逝去により坂上寛一委員を補充)

地学団体研究会推薦(1名): 酒井潤一

日本地形学連合推薦(1名): 野上道男

研究連絡委員会推薦(国際関係)(1名): 太田陽子
任期: 1994年10月21日から1997年10月20日まで

2. 研究連絡委員会を下記のとおり11回開催した。
1994年10月28日, 1994年12月16日, 1995年3月10日, 1995年6月16日, 1995年9月29日, 1995年12月8日, 1996年5月17日, 1996年9月20日, 1996年12月13日, 1997年5月23日, 1997年7月18日(議事録は「第四紀通信」に掲載した)

3. 今期の活動方針を決め(第3回議事録参照), 委員会での検討を進めた。

- (1) 国際第四紀学連合の活動要覧の改訂
- (2) 年代測定施設の現状把握と拡充について
- (3) 大学における第四紀研究の教育研究体制についての調査
- (4) シンポジウムの開催
- (5) 地域における第四紀研究の推進
- (6) 国際的な活動の推進

4. 国際第四紀学連合との対応

- (1) 第14回国際第四紀学連合(1995年8月, ベルリン)に代表(米倉伸之委員長)を日本学術会議から派遣し, 国際第四紀学連合副会長に太田陽子委員を, 名誉会員に渡辺直経氏を推薦し, 受理された。National report on Quaternary research in Japan for the inter-congress period 1991-1995 (Yonekura, N. ed.), National Committee for Quaternary Research of Japan, Japan Association for Quaternary Research 54頁を刊行した。兵庫県南部地震関連調査のポスターを展示した。ベルリン大会の報告は「第四紀研究」35-1, 41-62(1996年2月)に掲載した。
- (2) 国際第四紀学連合の分担金を平成8年(1996年)度から4650スイスフランから6560スイスフランに増額した。

5. 第四紀研究の教育研究体制についての調査

立石委員を中心に国立大学地質学系教室における第四紀研究関係の講義の開設状況について調査を行った。

6. 下記のシンポジウムを共催・後援した。

- (1) 「海岸・沿岸域研究を考える-IGBP/LOICZ研究計画シンポジウム」(1995年1月20-21日, IGBP/LOICZ研究班主催)を後援した。
- (2) 「1995年1月17日兵庫県南部地震調査速報会」(1995年2月18日, 日本第四紀学会と共催)
- (3) 「最新地質時代の地球環境シンポジウム: 第四紀における急速な海岸環境の変化・大陸棚」(1997年2月15日, IGCP専門委員会主催を共催

した)

- (4) 「地盤・水環境と気候変動」(1997年7月11日, 地下水技術協会主催を共催した)
- (5) 「アジア・西太平洋地域における第四紀環境変動に関する国際シンポジウム」(1997年10月14-17日, 日本第四紀学会と共催)

7. 関係研究連絡委員会, 学会との連携など

- (1) 第四紀研究連絡委員会委員長が地質科学総合研究連絡委員会委員として参加した。地質科学総合研究連絡委員会が提唱していた「地質科学関係学協会連合準備会」は諸般の事情から発足が延期された。
- (2) 第四部から申請していた文部省科学研究費補助金「時限付き分科細目」として平成9年度から「自然史科学」が採択されることになり, 審査委員会候補者の推薦依頼が自然史科学連合にあり, 日本第四紀学会からも候補者を推薦することになった。
- (3) 日本学術会議第1常置委員会から提言のあった研究連絡委員会の見直し案について検討し, 第四紀研究連絡委員会としての見解を関係研究連絡委員会などに平成8年12月21日に送付した。

8. そのほか

- (1) 国際第四紀学連合の活動要覧を改訂し, 第四紀研究に掲載することにした。
- (2) 年代測定施設の現状把握と拡充については, 実質的な検討を進めることができなかった。

9. 第17期への引き継ぎ事項

- (1) 国内の第四紀研究を推進し, 研究環境の整備を進める。
 - 1) 第四紀研究の将来計画や対外報告などを立案する。
 - 2) 第四紀研究の推進に関するシンポジウムを開催する。
 - 3) 研究機関および研究者のネットワークを整備する。
- (2) 国際第四紀学連合をはじめとする国際的な活動との連携を強める。
 - 1) 国際第四紀学連合の研究委員会の活動に積極的に参加する
(日本第四紀学会の研究委員会との連携)
 - 2) アジア太平洋地域での第四紀研究者との連絡, 協力を活発にする。
 - 3) INQUA国際大会の日本招聘の可能性を検討する。
- (3) 第四紀研究の後継者養成をすすめ, 第四紀研究に関連する教育体制を整備する。
 - 1) 第四紀関連の研究教育機関に関する広報をすすめる
- (4) 地球環境関連の国際共同研究計画を推進する。
 - 1) IGBP/PAGES, LOICZなど関連プロジェクトの推進を援助する。
 - 2) IGCPなど関連プロジェクトの推進を援助する。
- (5) 第四紀研究の研究成果の普及に努力する。
 - 1) 講演会, 公開シンポジウムなどの開催
- (6) 日本第四紀学会をはじめとする関連学協会との

連携を深める。

- (7) 研究連絡委員会の見直しに対しては、関連研連とも協力して、第四紀研連の実質的な存続に努力し、地質科学関連研連の拡充と整備を計る。
- (8) 第17期第四紀研究連絡委員会の構成について第四紀研連委員の推薦に当たっては、第16期における委員推薦方式を尊重する。具体的には、日本学術会議会員1名、日本第四紀学会からの推薦

委員9名、日本地形学連合からの推薦委員1名、地学団体研究会から推薦委員1名、研連独自の推薦枠として国際関係の委員1名を確保する。なお、日本第四紀学会からの推薦にあたっては、できるだけ広い専門分野、機関、地域から人材を得るため、同一研究機関から重複して委員が推薦されないよう配慮して欲しい。

◆ 第4回幹事会議事録

日時：1997年9月20日（土）14：00～17：30
 場所：東京大学理学部5号館地理学教室
 出席：米倉伸之（会長）、真野勝友、小野 昭、辻誠一郎、斎藤文紀、山崎晴雄

1. 庶務

- (1) 学術会議第四紀研連委員候補者の推薦について。評議員による投票結果に基づき、小泉 格、吉川周作、増田富士雄、小野有五、町田 洋、小池裕子、小野 昭、坂上寛一、大場忠道、太田陽子の10名の会員を推薦した。なお、古生物研連からも委員推薦の依頼があり、小泉 格会員を推薦した。(2) 日本地理学会より依頼のあった地理学協会連合（仮称）準備会への出席・加盟について議論したが、本学会自体が連合体的な性格を持っており、この連合に加盟しても大きなメリットは期待できないため、日本第四紀学会としては参加しないことに決定した。
- (3) 7月現在、長期の会費未納により雑誌の発送停止となっている会員数が155名に達する。これらについては状況を示すリストを整えた上で、除籍等の対応を検討することにした。

2. 編集

- (1) 第1回編集委員会を9月13日に東京都立大で実施した。36巻4号として論文5編を受理とし査読中の14編について新たな担当者を決めた。(2) 36巻5号（特集号）については10月下旬入稿予定。(3) 本年のシンポジウムは37巻3号として刊行予定。16編の申し込みあり。

3. 行事

- (1) 1998年地球惑星科学合同大会のセッションに「第四紀」というテーマで申し込みを行う。
- (2) 1999年度大会の開催地を打診中。

4. 企画

- (1) 10月18～19日第5回日本第四紀学会講習会を青森県三内丸山遺跡体験学習館で開催する。一般を対象とした普及講演会的なものを講習会とは別に企画した方がよいという意見あり。また、従来の講習会の資料・パンフレットを第四紀研究に講座などの形で載せた方がよいとの提案あり。
- (2) 2月14日（土）に第四紀学会シンポジウムを行う。会場は未定。時間は11：00～14：00 評議員会、14：00～18：00 喜界島関係シンポジウム（オーガナイザー：太田陽子）。

5. 機関誌・財政等検討委員会について

- (1) 委員の人選について検討を行い、5名の候補者を内定した（小池裕子、杉山雄一、鈴木三男、海津正倫、小田静夫）。庶務幹事が各人に連絡して同意を得る。委員会には幹事長がオブザーバー出席し、事務局は庶務幹事が担当する。2月の評議員会までに何回か会合を持ち中間報告できるようにする。(2) 委員会に関連して以下の議論があった。科研費の出版助成金の申請は12月初めの予定。申請には幹事が文部省に同行し熱意を示す必要がある。また、英語論文の割合を増やすためには雑誌の性格付け（国内向け雑誌か国際的な科学誌か）が必要。他学会では国内向け和文誌と海外向け欧文誌の2本建ての所がある。しかし、地理や地質学会の例では海外向けは国際誌としては成功していない。第四紀学会は国際誌は必要としないが、国内向けの雑誌とするにしても何らかの形で海外への定期的情報発信の手段が必要。第四紀研究を存続させ、同時に年1回刊行の定期刊行物として英文専門誌を発行したらどうか、などの意見が出された。

☆☆会費の支払いはお済みですか？☆☆

12月20日前後に今年最後の学会費の請求書が届けられます。これを受け取られた方で、まだ支払いを済まされていない方は至急支払いをお願いいたします。一年間会費未納の方は次号から『第四紀研究』と『第四紀通信』の発送が停止されます。未払いを繰り返された場合滞納額全部を納付されるまで会誌は停止されますし、一度に支払う額も大きくなります。また、長期にわたって滞納された場合は除籍等の対象ともなります。最新の情報を価値のあるうちに受け取られるためにも、是非滞りない納付をお願いします。

★★★ 第四紀通信に原稿をお寄せ下さい ★★★
広島大学文学部地理学教室 奥村晃史 〒739 東広島市鏡山 1-2-3
kojiok@ipc.hiroshima-u.ac.jp Phone: 0824-246657 Fax: 0824-240320
合同大会の膨大な案内だけで本号のページがなくなってしまいました。しかし、それがなかったら今回は8ページでした。
次号は1月中旬原稿締切・1月下旬発行予定です。
インターネットにアクセスできる方は第四紀学会ホームページ
<http://www.soc.nacsis.ac.jp/qr/>で最新情報をチェックして下さい。